「何処へ」論
―菅沼健次の人物造型を中心に―

中村博美

序

正宗白鳥が、島崎藤村、国木田独歩、田山花袋に続き、自然主義の新作家として確固たる地位を築いたのが、第二十作「何処へ」（『早稲田文学』明41・1～4）である。『早稲田文学』は明治四十二年二月の「推讃之辞」において、藤村の「春」とともに前年に発表された作品の中で最も優れたものとした。また、この「何処へ」は発表当時ニヒリズムの作品との評価を受け、その後白鳥の作品がニヒリズムと解される契機となる。

本論文では、主人公菅沼健次の人物造型を中心に控えて、「何処へ」とは果たしてニヒリズムの作品であるのか、そして白鳥の文学における「何処へ」の意義とは何なのかについて考えたい。

尚、本分の引用は『早稲田文学〈第二次〉復刻版・第三巻』（早稲田大学出版部）によった。

第一章　菅沼健次の人物像

第一節　健次の眼差し

「何処へ」は、劇的な展開のない、中途で「完結でないやうな完結」（『早稲田文学』明41・4）にされてしまった作品で、物語的な構成が無視されている。「まったく劇的事件のない小説[注1]であり、家族の生活を支える「心棒」（三）となることを期待されている雑誌記者の青年菅沼健次が、家族や同窓の友人である織田常吉や箕浦、恩師の桂田博士夫妻といった人々に取り巻かれて送る二週間ほどのことが描かれている。ただ、強いて筋らしいものがあるとするなら健次の結婚問題の動向であるが、「ノンセンス！」（八）と言って結婚について価値を認めない健次であるので、作品の中で深刻な問題とはなり得ていない。

この構成らしいもののない小説において一際注目されるのが主人公健次の人物像で、荒正人氏[注2]佐々木浩氏[注3]等その人

物造型を評価する論者も少なくない。健次は醒めた眼差しと内に秘められた情熱という相反する性質を持つ。彼は、五年前まで箕浦のように真面目な勉強家だったのだが、現在は「如何にして遊ぶべきか」（一）が当面の問題であるという生活を送っており、周囲からは「結婚しろ、真面目になれ、勉強せいと比頃お題目のやうに聞え」（六）てくる。だが、遊びに耽り醒めたような態度を取る今日であっても何物かへの情熱は存在する。本間久雄が「正宗白鳥論」（『新小説』明44・5）で、「日本のナイヒリスト[注4]であり、日本のデカダンである」と評し「近代の頽廃的傾向が生んだ当然の産物」と言っているように、健次には確かに何物にも酔えず一見投げやりなところがあるが、内には何かを求める激しい感情が潜んでいるのである。その性格の最大の特徴はこういった矛盾である。

ここで現在の健次の矛盾した性格について述べたいが、まず「ナイヒリスト」と取られかねない醒めた面を見る。

周囲に向けられる眼差しは非常に冷静で対象を選ばない。中でも人間関係にその態度が顕著に現れる。健次が他の人間と自分との関係について語った次のような言葉がある。

「僕はね奥さん（＊桂田夫人）、誰かに好かれたくも同情されたくもないんです。……現在の親だつて自分の子を解し得ないで、勝手に自分の頭で拵へ上げて喜んだり悲しんだりしてる、つまり人間は自分一人だ、自分と他人との間には越えることの出来ん深い溝渠が横ってるんです、箕浦だつて織田だつて、要するに私からは赤の他人で、互ひに本性を包んで突合ってるんです」（六）

健次は人間は所詮一人で生きていくものであるというこのような考えの下に、家族や友人や恩師の桂田博士夫妻といった周囲の人間を意識的に醒めた眼で見、冷静な態度を取る。また、このような醒めた眼は自分自身にさえも向けられ、冷静にその「下らな」（三）さを眺める。夜「独り黙然と静かな部屋に座ってゐると、心が自分の一身の上に凝り固まって、その日常の行為の下らないこと、将来の頼むに足らぬこと、仮面を脱いだ自己がまざ〳〵と浮び、終には自分の肉体までも醜く浅間しく思はれて溜まらなくな」（三）る。

彼は「主義に酔ゑず、読書に酔ゑず、酒に酔ゑず、女に酔ゑず、己れの才智にも酔ゑ」（八）ず、大学卒業後就いた中学教師や現在の雑誌記者といった仕事もその心を促えることはできない。醒めた眼差しはあらゆるものに向かう。健次は「人間は寄生虫」（十三）と信じ何物にも「酔ゑず」、将来についても纏まった考えはなく、ただ少し先の予定が分かっているだけで「跡は何が何やら真暗闇」（六）の状

態である。

第二節　健次の心の奥に潜むもの

対象を一歩離れて見るような状態を取る健次だがそれで決して満足しているわけではない。彼は「孤独の感に耐えぬ、淋しくてならな」（八）い。箕浦は健次を「己を欺いて趣味や情熱を蔑視してるんだ」（十三）と言うが、確かにその言動には何物かへの情熱が見え隠れしている。次に、醒めた眼差しの奥に秘められた激情について見たい。

健次は前述したように「人間は寄生虫」（十三）だと考えていたが、次のようにも言う。

「……僕等寄生虫にも血が流れてるし脳が働くから、余計なことを考へていかん、僕の拳にも力がある」（十三）

これは醒めてだけいるわけではないことを示す言葉である。彼にもいろいろと物が考えられるのである。そして、何かに作用を及ぼし得る「力」を持っているのである。下宿をしたい旨を母親に伝え、「何故かう考へがないんだらう」（四）と責められたときにも、「私だって考へてるさ」（四）と呟く。また、別の機会には「私だって、胸に苦労の絶えたことはありやしない」（三）とこぼす。これらも醒めきってしまった人間の口にする言葉ではない。遊びが本職のような生活をし、「人間は寄生虫、女は肉の塊」（十三）と悟ったような顔をしていても、彼は彼なりに考え、現状に甘んじて安閑としているわけではなかったのだ。

健次は少年の頃、「身体中に生命が満ちて、張合のある日」（八）を送り学生時代にも「色んな夢を見て」（十三）過ごした。だが、今は違う。「絶えず刻々の時と戦ってゐる」（十）。何をするのも「只持扱ってる時間を費す為のみで、外に何も意味はない。」（十）。健次は、「激烈な刺激に五体の血を湧立たさねば、日に日に自分の腐り行くを感じ、青春の身で只時間の虫に喰はれつゝ生命を維いでゐる現状を溜まらなく思」（十）う。

そんな彼は現在阿片のような刺激物を強く求めている。

正義も公道も問題ぢやない。自分を微温の世界から救ひ出して、筋肉に熱血を迸らすか、腸まで蕩ろかす者は、それが自分の唯一の救世主だ。（十）

刺激を求める姿は各所に見られる。一年前雑誌記者に転職したのも「もっと活気のあり動きのある役と志し」（三）たからであり、或る革命家の自伝を買い求めたのも、気紛れに書店に入り「何か自を刺激して、新しい生命を惹起こすものはないか」（八）と本を探した結果であった。ある日の新聞を読む様子にもその姿はある。『模範的学生』や『醜業婦』の記事、経済論から運動会の消息まで、

何物をか捜し求むる如く、残る隈なく目を通」（四）すのである。街頭で演説する救世軍というキリスト教のプロテスタントの一派に対する見方でも同様である。健次は立ち止まって二十分も聞く。拙い言葉でだが嘲笑されても石を投げられても泰然と説を進める様を、「……彼奴は地球のどん底の心理を自分の口から伝へてると確信してる。あの顔付を見給へ、自分の力で聴衆を皆神様にして見せる位の意気込みだ。人間はあゝならなくちゃ駄目だ。」（七）と言って、「欠伸をしないで日を送って」（七）いる演者を評価する。健次にとり演説の内容如何は問題ではない。

「……打たれやうが罵られやうが、自分のしてる事が何であらうと関ふものか、もつと刺激の強い空気を吸はにゃ駄目だ。」（七）

事の是非は関係がなく、「欠伸」をせずに刺激に満ちた毎日を過ごすことが彼にとっては意味があり、真に「生きて」（七）いるということなのである。この考えは次の箇所にも窺える。健次は周囲の人々を醒めた眼で眺めていたが、彼等に「愛せられてこそゐれ、さして嫌われてはゐない」（八）状態を物足りなく感じる。

愛せられゝば愛せられる程、自分には寂しくて力が抜けて孤独の感に堪へぬ、いつそのこと四方から自分を憎んで攻めて来れば、少しは張合が出来て面白いが、撫でられて憩められて、そして生命のない生涯それが何にならう。（八）

たとえ迫害を受けたとしても「生命に満ちた生涯」（八）が欲しいと言うのである。

このように刺激に五体の血が沸き立つ「生命に満ちた生涯」を送りたいと願う健次は現状を打破しようとする。その試みが下宿に移るということで、母親に反対されても下宿の下見をした彼は、「厭」（十一）な家を出て「新生涯を此処で始める」（十二）と決心する。そして、それまで出入りしていた桂田家にも近付かない旨を、「……もう此迄の友人や長く突合ってる人にはあきあきしました、これから新奇に事を始めなくちゃ自分の身が腐ってしまひます。」（六）と桂田夫人に伝えもする。

しかし、そんな彼であったが、少なくともこの作品の中では現状を抜け出すことはできない。作品が途中で完結にされているためかもしれないが、下宿の件も二三日中に返事をすると言っておいてその後何の動きもなくどうなったのか定かではない。また、健次には刺激物を強く求め、それが自然に目の前に現れないのなら「自分から進んで近付いて行く」（十）という意気込みがある一方、そのことさえも無意味に感じる気持ちがあり、次のように考えると力が入っていた「手は直ぐ弛んでしまふ」（十）。

社会のため主義のため理想のためと思へばこそ真面目で険崖上りも出来るが、初めから退屈醒ましと知って荊棘の中へ足を踏込めるものか。（十）

何にも酔えない状況から抜け出し「生命に満ちた生涯」を送りたいと激しく思う彼であるが、結局その願いは叶えられずに終わる。何も彼を刺激せず新生活の実現も立ち消えのような形になる。加えて、目的のないまま退屈を凌ぐためだけに刺激を求めることの意義にさえ疑いを持ってしまうのである。

桂田家での「小園遊会」の折、お開きとなる直前、場は疲労のため沈黙に包まれる。

健次は張詰めた気が弛んで誰かに縋りついて、自分の本音[注5]を吐いて泣いて見たくなった。「世界に取残された淋しい人が一人ある」と自分が頼り無く厭になる（十三）

健次は、尚目的のある「生命に満ちた生涯」への憧憬を持ったまま「只時間の虫に喰はれつゝ生命を維いである」状態に孤独感に堪えつつとどまっていなければならないのである。

以上のことから、醒めた眼差しを持つ健次の心の奥底には「生命」のある生活を求める情熱が燃えていたことがわかる。醒めた態度を取るその姿は一見すれば虚無的かも知れないが、ここで述べたように内面では「生命」のある生活への情熱がたぎっている。佐々木浩氏が「生の目標を見出し得ないで苦悶し、涙する健次の姿には、真実の生を求め、自己確立を希求する意思が潜んでいる[注6]」とするのは妥当な意見で、健次は生存を無意味と考えるニヒリストではないのである。生の充実を願っており生きるということに対して肯定的である。以下の千葉貢氏の考察も傾聴に値する物である。

『何処へ』は決して青年の観念的な虚勢や厭世観、あるいは諦観などを含めた「露悪家[注7]」の告白なのではなく、むしろ人生に執着する青年の逆説的な倫理観であり、深層心理を投影したイロニーなのである。

千葉氏は健次が生きることにひたむきであったことを認め、「何処へ」を「希望を胸に秘めた模索」だと主張する。生への情熱を燃やす健次は決してニヒリストではなく、そんな彼を主人公とするこの「何処へ」も決して虚無的な思想を表すものではない。そもそも白鳥自身ニヒリズムの作品を書こうという意図を持っていなかったことは、長谷川天渓により「何処へ」が初めてニヒリズムと評されたときのことを回想した次の文章から明らかである。

……長谷川天渓は、その頃発表した私の小説（＊「何処へ」）と、田山花袋の小説（＊「蒲団」）とを新味あ

る作品として批判した。私の物をナイヒリズム[注8]の作品であると云ふのである。私ははじめてそんな物々しい批判をされたので啞然とした。自分には夢にも思つてゐない事であつた。「ナイヒリズム」「ニヒリスチック」結局どんな所に落ちるのであらうか。天溪は無論褒めてくれたのだから、有難いのだが、彼によつて私の額に極印を捺されたので、その極印のまゝ一生文壇をうろうろすることになつたのである。（「一種のニヒリスト」『新小説』昭24・10）[注9]

このように、作者自身ニヒリズムの作品を意図したわけではなかったし、千葉氏が説くように、実際「何処へ」を貫いているのは絶望ではなく生きることへの「希望」なのである。

第二章　「何処へ」の意義

第一節　「著者の感想録」としての「何処へ」
——その作風——

「寂寞」（『新小説』明37・11）によって創作を始めた白鳥の作風は第七作「塵埃」（『趣味』明40・2）を契機に大きく変化していく。「塵埃」は筋らしき筋のない小説で、二人の校正係の平凡な日常や酒の席での何気ない遣り取りといった「些細なる事実の描写」を行いながら、「碌々として」老いていかなければならない人生の一現実の姿を主人公「予」の目を通し鋭く写し出し人生全般に対し思いが及んでいる。「塵埃」で獲得された小説のスタイルとは、明治四十年三月『早稲田文学』彙報欄「小説界（小説界の俯瞰図）」（無署名）において、三傾向に分析されている。「自然派」の中の次のものに当たると考えられる。

「人生の一大事を描き出さうとするものではあるが、それを正面から、若しくはその事実を細やかに条を逐うて写すといふことなく、否み難き人生の事実ながら、描ける事自からは重要なる事実にあらずして、寧ろその些細なる事実の描写が、其の事実の背景となれる広大無限の人生を暗示する如き一点を捉へて、これを嬌飾することなく描かうとする」もので短篇

「何処へ」では「塵埃」で獲得された小説のスタイルを見ることができる。筋らしいものが特にあるわけではなく、仕事は不真面目で遊ぶことに忙しい菅沼健次という青年が、日々家族や知人に忠告を受けるという「些細なる事実の描写」により青春期の人間の精神の彷徨を描き出すことに成功している。自我に目覚め、古い枠組みを越え新しい価値観を探る青年の営みがそこにある。主人公健次は、容易には解決の糸口が摑めず煩悶する。「力」（十三）を存分に注

ぎ込める対象のない彼は自分を持て余す。そして、その苦しさに堪え兼ねて、気を紛らわすため一時逃れに遊蕩に耽るが、周りで見ている者には不真面目な態度としか映らず社会的な責任を充分果たすよう求められる。内面は不安定な状態にあるし周囲の人間には理解してもらえないので彼には逃げ場がない。「生命に満ちた生涯」（八）への憧憬を秘めつつ、彼は彷徨い続けなければならない。結びの「行場所に迷った」（十四）という言葉は、心の拠り所のない彼の状態を象徴するかのようである。

ところで、この作品で注目すべきは作者白鳥の思いが強く出ているということで、明治三十八年夏に読み感嘆した『独歩集』（近事画報社　明38）における「著者の感想録ともいふべ」（「『独歩集』を読む」『読売新聞』明38・8・2）き小説のあり方が影響を与えている。彷徨する健次という青年には充実した生への希求という白鳥の思いが込められているのである。

健次の矛盾するような性格が作られたのは、キリスト教の信仰から離れ、従来の道徳や習慣にも否定的となっていた明治四十年頃の白鳥の心境をモデルとしたためである。「何処へ」の作品の時間は明治四十年十一月四日以降であり、また、既に瓜生清氏の指摘[注11]にある通り、作品の執筆開始時期も同年の十一月頃だと推測できる。明治四十年というと、新旧の世代は際立った思想の対立を見せていた。明治四十年十二月『文章世界』に掲載された「虚無思想の発芽」という評論で白鳥は以下のように述べている。

文学でも美術でも旧い見方を離れ、従来の道徳や習慣の束縛を脱して、真相を研究しようとする態度が少数の青年の間に起こってゐることは、紛々たる評論創作の間にも推察することが出来る。去年文相の訓令[注12]があり、それから諸先輩の煩悶救治策が現れ、吾人は彼等の考へのあまりにもお目出度いのを滑稽に感じたが、今日の青年の間に一種の暗い思想が湧きつゝあるのは争ふべからざる事実だ。……

まだ漠としてゐるが多少虚無思想の萌芽が発しつつあるのは事実だ。……

桂田博士や健次の父親が武士道の精神の衰退を嘆き当時の風潮に批判的であるのは、ここでいう「旧い見方」をする世代の人間だからである。「心底から憂世の情を溢れ」（五）させ「私なども進んで積極的に救済策を講ぜねばなるまい」（五）と言う桂田博士は「諸先輩」と同じ立場に立つものであろう。彼等は、明治維新を体験し、立身出世や武士道の精神を良しとする価値観をもって生きてきた世代の人間であり、その価値観は明治四十年代でも尚根強く残っていた。

そういう時代にあって、「従来の道徳や習慣の束縛を脱し」ようという知識人青年が出てくるが新たな理想や方針を見出すことはなかなかできなかった。石川啄木が「時代閉塞の現状」[注13]で言っているように、「理想を失ひ、方向を失ひ、出口を失った状態において、長い間鬱積してきたその自身の力を独りで持余」すにとどまるのである。彼等は「じつにいつさいの人間の活動を白眼を持つて見るごとく、強権の存在に対してもまたまつたく没交渉なのである。―それだけ絶望的なのである」(「同」)。白鳥は明治四十年九月二十二日発行の「読売新聞」紙上で次のように言っている。

武士道や常識道徳に対して何等不満もなく、先人の与へた形式の中に跼蹐して足れりとする人々は、それでも結構だが、それで心が安きを得ない者は、詮方なし。暗中模索して光明を求めて苦しむか、いつそ自暴自棄今日主義で押し通して行く外仕方がない。……吾人の最も同感する現代青年の一種の自暴自棄は、無性でもなく無神経でもなく、腹の中の苦悶が持ち切れないあまりの自暴自棄だ。(「随感録」)

当時、「従来の道徳や習慣の束縛を脱し」ようとする青年に残された道は、尚も新たな理想を求めて苦悩し続けるか自暴自棄に走るかしかなかった。後者は、啄木に言う、自身の力を持て余し、「抑えても抑えても抑えきれぬ自己その者の圧迫に堪えかねて、彼らの入れられてゐる箱の最も板の薄い処、もしくは空隙(現代社会組織の欠陥)に向かってまつたく盲目的に突進」(「時代閉塞の現状」)する姿である。古い価値観で「心が安きを得ない」彼等を、その苦悩を理解することなく、桂田博士や健次の父親といった古い世代の人間は「軽佻だ、浮薄だ」と評して卑しんだのであった。

白鳥もまたこの時代を生きた知的青年として苦しんでいる。明治三十四年に棄教したキリスト教[注14]や旧来の道徳や習慣では心を安んじることができなかった。明治三十四年の元旦に起草して弟の正宗敦夫に送ったという書簡には、「二百年も前の旧思想に満足して居」て「美を知らずに、善計唱」えているキリスト教への不信が綴られている。先に引用した「随感録」でも「徳川時代の人々が理想とした武士道は、最早吾人の頼む者でなく、仏教も基督教も無論駄目だ」とあり、同じく読売新聞に、「井上哲次郎に与ふる書」(『読売新聞』明37・2・21～23)や「中島力蔵に与ふる書」(『同』明37・2・24)といった、哲学界、倫理学界の権威を曲学阿世であると非難する文章を掲げてもいる。

しかし、このようにキリスト教や従来の道徳などを否定してみても、新たに方向を見出すことはできず、「人生に

対する新方針新理想の吾人を随喜せしむる者は一つとな」（「随感録」）い。この方向を見失った状態は、「自然主義盛衰史」（『風雪』昭23・3～12）で、島村抱月の留学中つまり明治三十五年三月から明治三十八年九月までの間、「何をしていいか分からない」ため「何もし」なかったと語られている。そして、彼は「白眼」をもって周りを眺めた。

一体が私は人から冷酷と言はれる程で、それが処世上のみならず、物を観るといふ上に於いてもさうである。些とも熱するといふこともなければ、同情して血を沸かすといふことがない。唯冷静に対して居る。（「静的に物を観る」『文章世界』明41・10）

だが、白鳥は全てを諦めてしまったわけではなかった。彼は「我等は何をなすべきか」（「自然主義盛衰史」）を知ろうと、留学から帰った抱月の「作品を読み、その談話を聞かうと心掛けた」（同上）りもする。「信じようと思っても信じられない」（「行く処が無い」『文章世界』明42・7）ので、「今は宗教心も、未来、超自然の観念も、私には総て無意義となって仕舞った。」（同上）と語る一方、「若し自分を満足させ得る宗教があれば、喜んでそれを信ずる」（同上）とも言う。尚解決の糸口を捜しているのである。前出の「文相の訓令」に批判的で青年の煩悶を分析してみせた波多野精一の論[注15]に、「自己の中心より独立なる内容豊かなる世界を開展するに至らず、従って自己の空虚を感じて悶えてゐるのである、煩悶の声は充実実在を求むる声である」とあるのを、白鳥は「最も適中する言」と評した[注16]。白鳥もまた「充実実在」を求め、仕事や遊びに忙しく日々を送りつつも、「我等は何をなすべきか」を考え続けていた。醒めた眼差しの奥に生の充実を求める情熱を尚残し「暗中模索して光明を求めて苦し」（「随感録」）んでいたのである。

ところで、旧来の考え方を否定しながらもそれに代わるようなものを見付けられず、「白眼」をもって全てを眺め、苦悩したり自暴自棄になったりする明治四十年頃の青年の姿は「何処へ」の主人公菅沼健次そのものである。健次は当年二十七歳で周囲にも学才を認められる大学卒業のインテリ青年であった。何にも酔えず何にも価値を認められず、周囲に「白眼」をむけ「胸に苦労の絶え」（三）ない状態で「何が何やら真暗闇」（六）の中で生き、遊びに耽って時間を消していく。「主義に酔ゑ」（八）ない彼は従来の道徳や習慣にも縛られていなかったが、また、今後どうしていけばいいのかということも分かっていなかった。「生命に満ちた生涯」（八）を求めながらも得られなかった。「如何にして遊ぶべきか」（一）を当面の課題とする健次は

「自暴自棄今日主義」であり、彼の「入れられてゐる箱の最も板の薄い処」である遊蕩の世界に「盲目的に突進」しているのである。彼の苦悩の本質を理解できない母親や桂田博士といった旧世代の人間は、遊びに耽るその姿を嘆き「真面目になれ、結婚しろ、勉強せい」（一）とお題目のように唱える。小言を言わない父親にしても、健次が否定する従来の価値観である武士道の精神をもって立身出世に励んでもらいたいと望む。

つまり、健次は当時の青年の置かれた状況を象徴するかのような人物だったのである。白鳥は「文壇的自叙伝」（『中央公論』昭13・2～7）において、「何処へ」について「あの頃の青年にはあんな気持ちに共鳴した者が多少はあつたやうだから不思議だ」と語っている。青年に共感されたのは、明治四十年当時新旧の世代の対立の中で悩み苦しむ彼等が自身の姿を「何処へ」の主人公菅沼健次に見たからではなかろうか。「どつしりした芸術的表現を具へ、作中人物の心理をも底深く洞察し追求してゐたなら、時代精神を示した一つの代表作として異彩を放つたかも知れない。」（「文壇的自叙伝」）と白鳥が回想したように、「何処へ」はその表現方法は未熟であったかもしれないが、当時の青年の共鳴を呼ぶに足るような一つの時代の様相を写し出していたことも確かである。

それでは、何故「何処へ」は時代を写すことになったのか。それは「何処へ」が白鳥の「感想録」であったためである。白鳥は後に「何処へ」をこう回想する。

社会の各方面の大家に対する敬意を、当時の私は何かにつけて失つてゐた。『何処へ』のやうな小説を書かうとする気持ちは、年々心底に醸されてゐたのだ。

（「文壇的自叙伝」）

回想の時期は、瓜生清氏が言うように[注17]、引用部の前に「当時新進作家になりかけてゐる」とあるので、「文壇で認められた意味での処女作」（『『処女作』の回顧』）であった「塵埃」が発表された明治四十年二月頃と推定できる。文面によれば、「社会の各方面の大家に対する敬意」を失っているような気持ちが、「何処へ」という作品を生んだことになる。明治四十年と言えば白鳥が前出の「随感録」を書いた年で旧世代のものへの批判を激しく行っていた。大家への敬意の喪失とはそういう旧世代のものへの反発から起こったことであろう。この資料は、明治四十年頃旧套を破ろうと試みた青年の一人であった白鳥の、何にも価値を認められないという気持ちが「何処へ」を生んだことを示すものである。その煩悶が「何処へ」を書く動機となったのである。健次が全くの虚無主義者とはならずに、「自暴自棄今日主義」の生活をする現在であっても、その状態に

満足することなく現状の打開を試み、尚も「生命に満ちた生涯」を送りたいと願っているのは、白鳥が諦めてしまわずに、醒めた眼差しの奥に生の充実を求める情熱を残し、「我等は何をなすべきか」を考え続けていたからである。健次に残されていた生への情熱はまた白鳥のものでもあった。佐々木浩氏が健次の人物像に「白鳥の向上的な生への志向」[注18]を見ることができるとするのは的を射た意見で、広津和郎が「正宗白鳥小論」[注19]において、「……『何処へ』にしても『妖怪画』（＊『趣味』明40・7）にしても、醜悪になるものに対する憤りがその基調をなしてゐます。換言すれば氏の絶望否定の底には、醜悪ならざるものを求むる霊魂の叫びがあるのです。」（傍点原文）と述べ、絶望や否定の裏に潜む全く逆の感情を捉えているのも本質を突いたものと言える。前章で述べたように、白鳥にはニヒリスティックなものを書こうという意図はなく、実際「何処へ」に現れているのは生きることへの希望であり、充実した生を望む一種の理想主義的な考え方なのである。その意味で、中村光夫が白鳥をして「氏…ほど頑固で純血な理想家はゐない」[注20]と言っているのも諾える考えである。

白鳥には「何処へ」において「『時代精神』の具象化」をしようとする意図があったのだと見る瓜生清氏の意見[注21]もあるが、それよりはむしろ、独歩の影響による「著者の感想録」ともいうべき作風がここに現れていると取るべきである。自分の主観をそのまま作風にしたら、彼が明治四十年頃新理想を求めて煩悶していた青年の一人でもあったために、そういう時代の気分を持った主人公が登場する作品になってしまったのではないだろうか。意識的に「『時代精神』の具象化」がなされたのではなく、その時代の煩悶する青年と同じ問題を抱えていた白鳥が感じたままを書いたので、その彼を通して、結果的に作品が時代精神を写すこととなったのである。健次の人物像は、白鳥個人の姿が、そして結果的に当時の新旧世代の理想の対立という社会状況が投影されて作られたものであった。

白鳥は「何処へ」で、日露戦争以前の「遊戯分子に富んでゐて、現実に肉迫したところは乏しく」（「我が生涯と文学」『我が文学と生涯』新生社　昭21・2所収）筋を持っているという小説のあり方から離れ、独歩の影響の下に、従来の小説にはない、作者の主観を強く出して人生の一面を写し取る、小説としての構造にあまり配慮しないという作風をほぼ完成させた。この意味で、「何処へ」は明治三十七年以来創作を続けていた白鳥の一つの到達点であった。さらに、「何処へ」は「著者の感想録」であったが故に、新旧世代の思想の対立の激しかった明治四十年頃、新理想を求めて煩悶する知的青年の一人であった白鳥を通し、そ

の時代の精神をも窺わせ得る作品となっている。

抱月が「何処へ」を佳作として上げたように[注22]、当時この作品は文壇で評判を呼び、明治四十二年二月「中央公論」は「正宗白鳥論」を特集した。この時点で白鳥の作家としての地位は確立したと言えよう。

第二節　白鳥にとっての「何処へ」の意味

「何処へ」は白鳥の文学において如何なる位置にあるのか。

白鳥は「何処へ」を書いた後「微光」(『中央公論』明43・10)や「泥人形」(『早稲田文学』明44・7)、「入江のほとり」(『太陽』大4・4)のような独歩の影響による自然主義的な作風の作品を次々に発表し、当時小説を書いていた真山青果と共に自然主義の旗手と謳われた。これらの作品は社会や人間といった現実の世界に目を向け、人生の真実を描こうとしたものであった。

だが、新現実派の人々が台頭してきて自然主義的な作風が持てはやされる時代ではなくなりつつあった大正五年頃を境に創作活動に翳りが見え始める。白鳥は体調も思わしくなく「次第に執筆難を感じ[注23]」るようになり、「文学を棄て[注24]」る覚悟をして郷里の岡山県に引き上げる。しかし、彼は大正九年大磯に転居して後、それまで社会や人間に向けていた目を現実を越えた存在に向けるという新たな方向で文学活動を行う。以後の白鳥の文学は、神への関心を取り戻し徐々に懐疑を捨て平凡な信仰に入っていく信仰回帰の歴史である。その新なる方向の出発点は大正十一年五月『解放』に掲載された「迷妄」で、明らかに作風が変わっている。神と人間の能力の差、人間の魂、「平和」を得るには神に慈悲を請うべきか等について人里離れた荒廃した庵に住む男と三つの魍魎とが会話するというもので宗教的色彩の濃い作品である。大岩鉱が「実存的小説[注25]」と呼ぶのも妥当かと考えられる。白鳥は小説以外の戯曲や評論の分野でも、死んだ方が本人の「幸福」となると考えて異母妹を殺そうとする男が登場する戯曲「人生の幸福」(『改造』大13・4)や評論「ダンテについて」(『中央公論』昭2・3)等魂や神をテーマとするものを書くようになる。平凡な信仰への憧憬は「ダンテについて」や評論「内村鑑三」(『社会』昭24・4)、「生きるといふこと」(『毎日宗教講座・一』昭33・1・25所収)、小説「今年の秋」(『中央公論』昭34・1)等で繰り返し述べられ、白鳥は植村環牧師にキリスト教を「単純に考えて信じます[注26]」と語り、昭和三十七年十月二十八日最期に「アーメン」と言って亡くなる。

白鳥の大正十一年以降の文学は、臨終の際の「アーメン」という信仰告白に至るまでの精神の歴史であった。では、

以前の作風とどういう点が変わったのか。第一に、描こうとするものが人生の真実から神はいるのかという宗教的な問題に変化したことが上げられる。第二に、作者の考えがより強く出されるようになったことが指摘できる。白鳥が小説よりは戯曲や評論に重心を移したのは、より自分の考えをそこに盛り込みやすいからである。描こうとするものが宗教的な問題に変わったのもそれについての彼の関心が大きかったためであった。小説も、小説なのか随筆なのか判断が難しい、作者の気持ちを書き流したようなものが出てくる。

このことから、「何処へ」によって白鳥の文学の方法はほぼ決定づけられていたことが分かる。彼の関心の在処に伴い描かれるものは変化したが、自分の「感想」を綴るという点ではさらにその傾向を強めている。「何処へ」とは白鳥の文学歴の中で自然主義的作風を完成させたものであり、大正十一年以降作風が変わっても主観を出し構成にあまり配慮しないという点は引き継がれていく。「何処へ」は、文壇で作家としての確かな地位を得た点でも重要な作品だが、白鳥のその後の文学の方法の基礎となったということでも意義深いものである。

結び

白鳥の文学はこの作品以後ニヒリズムだとの評価をされその流れは昭和にまで及ぶ。しかし、ニヒリズムと言われるきっかけとなったこの「何処へ」はそもそもニヒリズムの作品であったのか。

「何処へ」とは、希望を胸に秘めて如何に生きるべきかを模索する青年の精神の彷徨を描いた作品であった。白鳥の思いが投影された主人公菅沼健次は周囲を冷たい眼差しで見つめ、遊びに耽る毎日であるが、彼の心中は決して穏やかなものではない。青春の身でありながら徒に過ぎて行く時間を惜しみ、意義のある充実した生涯を送りたいと切望する。生きることを肯定し行動に意味を求めているのであり、その考えは理想主義的でさえある。よって、健次をニヒリストと呼ぶことはできないし、生への情熱を燃やす青年の煩悶を描いたこの「何処へ」をニヒリズムの作品とすることもできない。

また、独歩の感化による、構成を考慮せず「著者の感想」を作品に織り込むという従来の小説にない作風は「何処へ」においてほぼ完璧な形を備えた。作者の主観が強く出ており、主人公と作者を全く同一視することはできないにしても、健次の心の有様は時代の転換期に青春を送った白鳥の精神を写したものである。以後題材が変化することはあっても、この方法で作品が書かれていく。白鳥の文学における「何処へ」の意義とは、自分は創作に向かないと自ら極

めていた彼が、その方法を確実に身につけ晩年まで精力的に文学活動を続けていく要因となったことである。

「何処へ」とは、白鳥の文学をニヒリストとしてきた見方に再考の必要性を迫るものであり、彼の創作の方向を決定づけた重要な作品である。

《注》

注1　中村光夫「正宗白鳥（人と文学）」（『中村光夫全集三』築摩書房　昭47・7所収）

注2　「解説」（『現代日本文学全集十四』築摩書房　昭30・9所収）

注3　「『何処へ』小論―主人公の人間像を中心に―」（『文芸研究』第六十一集　昭44・2）

注4　nihilistをこう発音したらしい。

注5　ルビは原文のまま

注6　注3に同じ

注7　千葉氏は、夏目漱石の『三四郎』の中に出てくる「偽善を偽善其儘で先方に通用させ様とする正直な所」が特色である「露悪家」の意味で用いる。

注8　nihilismをこう発音したらしい。

注9　引用には『正宗白鳥全集』（福武書店　昭58～61）を使用した。以後、「何処へ」以外の作品の引用は同所による。

注10　「何処へ」の作品の時間は、平岡敏夫氏の指摘（『日露戦争後文学の研究・上』有精堂出版　昭60・5・20）の通り、桂田博士の甥で軍人の久保田が「今二年日露戦争が遅かつたら、僕は遼東の野に屍を曝すのだつたが、無念だ」（十三）と言っていることから明治四十年だと考えられ、月日は、天長節の翌日から話が始められているので十一月四日以降である。

注11　「『何処へ』論―白鳥と時代精神―」（『北九州大学文学部紀要』二十七　昭56・7）。父親が新聞を読んでいる健次に「何とか中将の姦通事件はどうなつた」（九）と尋ねるところがあるが、その姦通事件とは、「東京朝日新聞」が明治四十年十一月二十七日に報じた「伊東中将醜行事件」（新聞集成明治編年史編纂会編・財政経済学会蔵版『新聞集成明治編年史第十三巻・戦後国勢膨脹期』昭46・11・15刊）のことを指していると考えられ、「何処へ」は翌年の「早稲田文学」一月号にその九章までが掲載されているので、「東京朝日新聞」の報道からそう遠くない時期に書き始められた可能性が高いと言えるのである。

注12　文部大臣牧野伸顕が明治三十九年六月九日学生の思

想風紀の振粛について訓示した。

注13　副題は「強権、純粋自然主義の最後および明日の考察」。明治四十三年発表。『日本文学全集・国木田独歩・石川啄木集』（集英社　昭47・10・7）所収。

注14　自筆年譜と伝えられる『現代日本文学全集第二十一巻・正宗白鳥集』（改造社　昭4・2・3・）の巻末の年譜に「この年（＊明治三十四年）、基督教を棄つ」とある。

注15　「早稲田文学」（明9・10）で特集された「文相訓令に対する意見」の中の一つ。引用は『早稲田文学〈第二次〉復刻版』（早稲田大学出版部）による。

注16　「文芸時評（独歩、鬼太郎他）」（『読売新聞』　明39・10・10）

注17　注11参照

注18　注3に同じ

注19　「私の好きな正宗氏」（『文章世界』大6・1）3を改題したもの。『広津和郎全集第八巻』（中央公論社　昭49・2）所収

注20　「日本脱出」（もと『文芸』〈昭24・3〉に「ロマンチスト白鳥」と題して発表されたもの。それが『作家論集一』に「日本脱出」と改題して治められる。『中村光夫全集三』筑摩書房　昭47・7所収）

注21　注11参照

注22　「自然主義の価値」（『早稲田文学』明41・5）。『明治文学全集四十三・島村抱月・長谷川天溪・片上天弦・相馬御風集』（筑摩書房　昭42・11・15）所収。

注23　自筆年譜（注14参照）に「大正七年　近年次第に執筆難を感じ、且つ人生に対する倦怠を覚ゆること甚し」とある。

注24　自筆年譜（注14参照）に「大正八年……十一月中旬、帰郷した。出来ることなら文学を棄て、都会生活を止めやうと思ふ」とある。

注25　『正宗白鳥論』（五月書房　昭46・9・30）

注26　注25に同じ

参考文献一覧

後藤亮　『正宗白鳥　文学と生涯』（思想社　昭41・9・1）

後藤亮　「正宗白鳥の生涯」（『現代日本文学大系十六・正宗白鳥集』筑摩書房　昭44・7・15所収）

山本健吉　『正宗白鳥』（文芸春秋　昭50・4・15）

吉田精一　『自然主義の研究・上巻』（東京堂出版　昭30・11・30）

吉田　精一　『自然主義の研究・下巻』（東京堂出版　昭33・1・31）
兵藤正之助　『正宗白鳥論』（勁草書房　昭43・12・10）
佐々木　徹　『正宗白鳥　人と作品二十四』（清水書院　昭42）
平　野　謙　「解説」（『カラー版日本文学全集十二・徳田秋声・正宗白鳥』河出書房新社　昭44・11・20所収）
猪野　謙二　「白鳥と泡鳴」（『明治の作家VI・自然主義の作家（二）』岩波書店　昭41・11・30所収）
新保　邦寛　「正宗白鳥『何処へ』試論」（『北海道教育大・語学文学』二十一　昭58・3）
佐久間保明　「『何処へ』の行程―菅沼健次の系譜―」（『日本近代文学』三十六　昭62・5）
相馬　庸郎　「正宗白鳥」（『文学・一九一〇年代』明治書院　昭54・3・25所収）
勝本清一郎　「正宗白鳥論」（『新潮』〈昭2・8〉に「作家としての正宗白鳥氏を論ず」と題して発表されたもの。『勝本清一郎・近代文学ノート一』みすず書房　昭54・7・10所収）

付記　引用文の傍点は、特別の注意のない場合は全て引用者によるものである。引用文中の＊は引用者による注であることを示す。